

エンゲルスとヒルファーディング

——資本主義分析の方法と「社会化」・「独占」論を中心に——

高山 満

(一) はじめに

エンゲルス没後100年を記念して、この所改めてエンゲルスの所説を多角的に再検討しようとする試みが各方面でなされているようである¹⁾。この背景には単に没後100年記念といったことだけでなく、恐らくは、旧ソ連邦を中心とする「社会主義」体制の歴史に一応の終止符が打たれたという世界史的情況の下で、「社会主義」について改めて根源的に考究することが、とりわけマルクス派にとって焦眉の問題として突きつけられているという事情があろう。

その際、終生の盟友マルクスと共に、「社会主義」の理論、実践の両面において指導的立場にあったエンゲルスの思想や理論が、没後100年ということのを別にしても、改めて再吟味の俎上にのせられるということもある意味で自然の成り行きとも言えよう。

ところで、筆者も数年前に経済理論家としてのエンゲルスの資本主義分析の基礎概念をなす「社会化」範疇、その系論としての「独占」論について、エンゲルスの主著の一つ『反デューリング論』を中心に内在的検討を試みたことがある²⁾。この小論はエンゲルスの「社会化」論をもって、後続マルクス派「帝国主義」論に受け継がれ、それら諸説を貫く基本的分析視角——星野中氏のいわゆる「社会化」進展図式³⁾、「帝国主義論の「社会化」論的理論構成³⁾——であるという問題を提起された星野中氏の見解にせし、改めてそれまで内外のマルクス派特にいわゆる“正統派”と称される論者の間であって、一般的に一義的に明白な内容のものとして受けとられ、必ずしも細密な吟味を加えられることなしに——少なくとも筆者にはそう見えた——⁴⁾流通されてきた、エンゲルスのいわゆる「社会化」概念（「生産手段」⁴⁾と「生産そのもの」の「社会化」）、それと内的に結びつけられている彼の「独占」⁵⁾、「国有化」論の再検討の必要を感じて書いたものである。この拙稿は紙幅と時間の制約から、エンゲルスの見解自体の考究のみに終り、後続マルクス派との対比にまでは及び得なかった。そこで、本稿においては後続マルクス派の中でも資本主義の構造変化について最も理論的密度の高い、体系的理論を提示したヒルファーディングとエンゲルスの資本主義分析の方法と「社会化」・「独占」論を対比的に検討し、それによって星野氏の言われるような緊密な方法上の継承関係があるかどうかについて考察することにしたい。したがって、本稿は内容上は前稿の続篇をなすもので、本稿をお読み頂く方は是非前稿の参照——本稿においてはエンゲルス説についての検討の細部（特に論証）を再現し得ないので——をお願いしたい。

- 1) このような試みの一つとして、杉原四郎、降旗節雄、大藪龍介編『エンゲルスと現代』（お茶の水書房、1995）がある。本書はエンゲルスの「哲学」、「経済学」、「社会主義論」、「国家論」を主要な柱とした包括的な研究の形をとっている。「経済学」の部分は降旗節雄氏、桜井毅氏、江夏美千穂氏が担当している。前二者は主として『国民経済学批判大綱』や『イギリス労働者階級の状態』を中心に、マルクスとの対比において、マルクス派経済学におけるエンゲルスの位置づけとその学説の特徴を論じており、又江夏氏のは「絶対的窮乏化論」を言わばエンゲルス——マルクス問題のような形で論じたものである。なお、鎌倉孝夫氏もエンゲルス「社会主義論」の検討の中で、彼の資本主義分析に論及している。本書の他にも、エンゲルスを手放しで讃えるてい雑誌解説や、書物も見受けられるようである。その一例として中村静治著『エンゲルス讃歌』（信山社、1994）がある。
- 2) 高山満「エンゲルス論——断片——「社会化」、「独占」論を中心に——」（『社会労働研究』36巻1号、田代正夫教授退職記念号、法政大学社会学部学会、1989）。
- 3) 星野中「帝国主義論史における「社会化」論的系譜」(1)（『経済学雑誌』72巻2号、14頁）。
星野氏の主要関連労作としては下記のものも参照さるべきであろう。
(一)「帝国主義論史における継承と飛躍——降旗説における「世界資本主義論的系譜」を中心に——」（『経済学雑誌』71巻6号）
(二)「資本主義発展の歴史的傾向と新段階——マルクス、エンゲルス」（入江節次郎・星野中編『帝国主義研究Ⅱ』、お茶の水書房、1977）。
- 4) F. Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft (Anti-Dühring), Marx-Engels Werke Band (20), S. 259, Dietz Verlag, 1962, 『マルクス・エンゲルス全集』（20）286頁、大月書店、1968。以下では Anti-Dühring, 『全集』と略記、但し引用注は初出のみとする。
- 5) F. Engels, Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft. Marx-Engels Werke (19) S. 224 『マル・エン全集』（19）218頁、以下、Entwicklung, 『全集』と略記

(二) 資本主義分析の方法と「社会化」論——エンゲルスとヒルファーディング。

I エンゲルス

さて、筆者は前稿において、エンゲルス独自の「社会化」概念、それに基づく彼の資本主義経済論の基本的内容が提出されている『反デューリング論』、とりわけその第3篇「社会主義」、第3章「理論的概説」を中心に、『空想から科学への社会主義の発展』（労働者の啓蒙に役立てるため前者の内容を部分的に取り込んだ）を加えて、エンゲルス自身の理論展開に能う限り密着して検討を加えた結果、エンゲルスのいわゆる「生産手段」の、更には「生産そのもの」の「社会化」規定、それに基づく、星野氏のいわゆる「社会化進展」の経路を描いたシエーマは論理的かつ理論的に極めて問題の多いもので、エンゲルス自身の論理にしたがってみても成り立たないのではないかという結論に達した。

このようなエンゲルスの「社会化」論が、星野氏の言われるように後続マルクス派の理論を一貫して規定するような影響を及ぼしたのかどうかについては改めて検討されてよい問題ではないか、と筆者は考えている。

紙幅の極めて制限されている本稿においても、全面的展開は期し難いが、エンゲルス、ヒルファーディング両者の方法・視点に焦点を絞って検討を行なうことにしたい。したがって又、本稿

においても関連する内外のエンゲルス論について直接取り上げることはできないが、拙稿（前稿を含めて）全体がこれらについての筆者の判断を示すことになる。

さて、既述の如く、筆者は前稿においてエンゲルスのいわゆる「生産手段の社会化」や「生産そのもの」の「社会化」規定は内外においてこれまで一般的に受けとられてきたほど、一義的に明解なものでも、自明なものでもなく、むしろ極めて錯雑した内容のものであること、更に当該論点に関連のあるマルクスの『資本論』における議論とも必ずしも整合しないものであることを明らかにしてきたが、本稿の読者に、本稿の論旨をできるだけ誤りなく理解して頂くためには、前稿の要点だけはかいつまんで示しておくことが必要であろう。

◇「生産手段の社会化」

まず「生産手段の社会化」について、エンゲルス自身の議論に則してみても、そこには明らかに内容上区別されてしかるべき二つの規定が混在或は並存しているのである。すなわち、一つは「生産手段」、とりわけ労働手段の規模の大小に着目した、言わば素材論的視点、或は一先ず形態規定から明らかに切り離されてとらえられている生産力視点からの規定である。内容的には、それは「矮少な」、個人で操作可能な「労働手段」の「人々の総体によってしか使用できない社会的な生産手段⁶⁾」への転化のことを意味し、エンゲルスはその具体例として、「糸車⁷⁾」、「手織機⁸⁾」等に対し、「紡績機械⁹⁾」、「力織機¹⁰⁾」、「蒸気ハンマー¹¹⁾」を対置している。

今一つは、孤立分散する小生産者達によって用いられた道具類の「大きな仕事場への集積（Konzentration）、それに伴って個々人の生産手段（労働手段のこと〈引用者〉）であったものの社会的生産手段への転化¹²⁾」という規定である。

このような区別立てに対しては、エンゲルスの議論の文脈では、資本の作業場に「集積」された「矮少な」労働手段が巨大なものに転化するのだから、一個同一の規定ではないかというエンゲルス擁護論が直ちに飛び出しそうであるが、労働手段の「集積」はそれ自体は、分散していたものの、資本の下への集合＝「集積」という、言うなれば量的規定であるのに対し、集団で共同的にのみ操作可能な労働手段への転化としての「社会化」規定は、機械を例に挙げている所からみても、質的＝素材的变化を軸点とし、巨大労働手段——道具等と対比して——の登場に伴って始めて成立する規定であって、エンゲルス自身の説明に従っても、両者を一緒くたにすることは所詮無理な話であろう。

エンゲルス自身、『空想より科学への社会主義の発展』の中で、第二の「集積」論に言う所の「社会化」が資本主義の生成段階において既に成立していることを明確に述べているのである。すなわち、次の如し。

「二。資本主義革命——まず単純協業とマニファクチュアによる工業の改造。これまで分散していた生産手段の大きな仕事場への集積（Konzentration）、それに伴って個々人の生産手段であったものが社会的生産手段に転化する¹³⁾」。これは正に歴史的形態規定の見地からの「生産手段の社会化」論であろう。

エンゲルス自身にあっては、この二つの規定のそれ自体としての相違についての認識は全くなく、あたかも同一のことであるかの如く論じている。

◇「生産そのもの」の「社会化」

続いて「生産そのもの」の「社会化」について。「生産そのもの」が「一連の個人的行為から一連の社会的行為に変わる¹⁴⁾」こと。

これは一見した所上述の「生産手段の社会化」に即応した規定のように思われるのであるが、実はそうではないのである。

「社会化」という同じ言葉が使われていても、それは明らかに「生産手段の社会化」論と論理構造が異なっていて、とても同日には論じようのないものなのである。エンゲルスのいわゆる「社会化」論といっても到底一括りにして片付けられるものではないのである。たとえエンゲルス自身は同一の論理の線上で立論している積りであったとしてもである。

エンゲルスが「生産そのもの」の「社会化」ないし、「社会的生産¹⁵⁾」と言う時、「総体としての¹⁵⁾人々」、多数労働者の「生産手段」に対する位置づけ——前者による後者の共同利用の態様——が、この「社会化」規定の決め手とされている訳ではないのである。そうではなくて、彼は個別の労働過程に参加する個々の労働者の作業の有機的連関性、その裏面をなす各個の労働の非自立性、非自己完結性ということをもって、「生産そのもの」のいわゆる「社会化」の基本的内容としているのである。次の一文にその規定の核心が示されている。「生産そのものも、一連の個人的行為から一連の社会的行為に変わり、生産物も個々人の生産物から社会的生産物に変わった。今では工場から出てくる紡糸や、織物や金属製品は、それらが完成されるまでに次々とその手を通してこなければならなかった多数の労働者の共同の生産物であった。彼等の誰一人として、それは私がつくったものだ、それは私の生産物だということはできない¹⁶⁾」。

このエンゲルスの説明をとくと吟味してみると、ここに言われている「生産そのもの」の「社会化」それ自体は、資本主義生産過程固有の構造というよりもむしろ作業過程分業という労働様式がとられている場合——完成品製造工程の単純、複雑の相違はあれ——常に一般的に妥当するという意味で、抽象的なもの——各部分労働の非自立性の規定——に他ならないのである。資本主義的マニファクチュア労働（分業を組み込んだ協業）から、資本主義的という規定を取り去った後に残るものが、実はこの「社会化」規定の実質的内容なのである。

とまれ、以上二つの「社会化」規定（「生産手段」と「生産そのもの」のそれ）を挺子にして、エンゲルスは資本家個人の企業→「株式会社¹⁷⁾」→「トラスト¹⁸⁾」→「国内的独占」「トラスト¹⁹⁾」→「国家的所有²⁰⁾」という、星野氏のいわゆる「社会化進展」系列を展開しようという訳である。筆者は前稿において、この「社会化進展」論がエンゲルス自身の論理に従ってみても、成立し難いのではないかという疑問を提出しておいた。エンゲルスの「社会化」論にせつして生ずる疑問は、「社会化」とその前提となるはずの所有関係——より適切には生産関係——との関連が一義的には明確でないという点についてである。すなわち、資本としての形態規定を受けとる「生産手段の社会化」（「資本の集積」）という点に力点がおかれるのではなく、むしろ「集積」された「生産手段」が「人々の総体によってしか使用できない」という意味での「社会化」から所有関係の必然的転化を説こうとするが、それがうまく行っていないのである。

それでは、「生産手段の集積」としての「社会化」からの「社会化進展」の方向は、論理必然的に説けているかという点、これも必ずしもそうはなっていないのである。

エンゲルスの場合、「生産手段の社会化」や「生産そのもの」の「社会化」を蓄積論視点から

論じるという方法意識が必ずしもマルクス程には明確でないため、「生産手段の社会化」の「進展」が何故、同時に必然的に所有形態の転化でもあるかという点は、決して一義的に明瞭ではないのである。

なるほど、エンゲルスは極度の膨張力を発揮する「生産力がこのように自らの資本という性質に抵抗²¹⁾」、資本主義の枠内ではあるが、可能な限り自らを「社会的生産力として取り扱う²²⁾」ことを資本に強要する。この顕われが恐慌だという論述を行っており、一見すると資本に包摂された生産力という形態規定を踏まえて議論しているようではあるが、上記引用文からも明らかのように、生産関係としての資本に対し、「強大な生産力」（機械体系）をやや形式的に、外的に対置し、そこから「社会化」「進展」を説こうとしているのである。

ところで、エンゲルスは恐慌、産業循環と「社会化」の一階梯としての「株式会社」を関連づけるべく次のような論述を行っている。

「産業好況期は、信用を無制限に膨張させることによって、又恐慌そのものも、大規模な資本主義企業の倒産を通じて、各種の株式会社においてわれわれが目当りにしているような、大量の生産手段の社会化の形態に向って駆り立てる²³⁾」。

みられる通り、ここでは恐慌→倒産→資本の集中→「株式会社」＝「生産手段の社会化」という論理展開になっているが、上記の文章では、既に「株式会社」形態での蓄積が一般化している段階での資本間の競争——ここでは既に競争形態、構造も変化し、したがって産業循環も変容しているはず——を通した資本の集中、集積を論じようとしているのか——これでは「社会化進展」の説明にはなるまい——、それとも、個人企業間の競争を通した淘汰、集中——実は既にここでは「株式会社」形態が媒介機能を果たすのだが——を介して、「株式会社」＝「大量の生産手段の社会化」を説こうとしているのか——もちろん、この論理では「株式会社」の一般化の必然性は説けない——一向判然としないのである。いずれにしても、上記の説明によって、エンゲルスのいわゆる「生産手段の社会化」の必然的展開が明らかになった訳ではない。

それでは、「生産そのもの」の「社会化」すなわち、有機的相互連関のもとで各個の部分労働者が特定の完成品生産に向って協同作業して行く分業の態様から、「社会化」の「進展」を必然的なこととして説けるだろうか？ この規定から、「個人企業」→「株式会社」→「トラスト」→「国内的」「独占トラスト」→「国家的所有」の必然的移行が説ける訳がない。けだし、「個人企業」から「トラスト」にいたるまで、その労働＝生産過程に着目すれば、各個の労働者を付属器官化した異種機械間「分業」といった態様での「分業」構造の高次化、構造変化はあるにしても、「生産そのもの」の「社会化」の構図、すなわち一個の完成品はそれが「完成されるまでに次々と」多数労働者の逐次的作業を経なければならないという基本構造そのものに変化が生じる訳ではないからである。そういう訳で、この「社会化」からも所有形態の転換を導こうとするのは土台無理な話であろう。これらの論点について更に詳しくは、前稿の参照を乞う。

6)～(11 Anti-Dühring, ibid., (20) S. 250. 『全集』(20)278頁

12) Entwicklung, ibid., (19) S. 227, 同上『全集』(19)224頁, 傍点引用者

13) ibid., 同上, 傍点エンゲルス, ◦印引用者

14) Anti-Dühring, ibid., (20) S. 250, 同上(20)278頁, 傍点引用者

15) ibid., S. 252, 同上280頁

- 16) *ibid.*, S. 250, 同上278頁, 傍点引用者
 17)~18) *Entwicklung*, *ibid.*, (19) S. 222, 同上(19)219頁
 19) *ibid.*, S. 220, 同上217頁
 20) *ibid.*, S. 222, 同上219頁
 21)~22) *Anti-Dühring*, *ibid.*, (20) S. 258, 同上(20)286頁
 23) *ibid.*, S. 250, 同上278頁

II ヒルファーディング

以上要約したエンゲルスのいわゆる「生産手段の社会化」, 「生産そのもの」の「社会化」規定は、後続マルクス派の中でも理論的に一際卓越した業績をあげたヒルファーディングの資本主義分析に基本的に引き継がれているであろうか？

結論を先取して言えば、ヒルファーディングがエンゲルスの「社会化」論を踏まえて、『金融資本論』を構成したとは到底考えられないということである。確かに、ヒルファーディングも「社会化」という言葉自体は、『金融資本論』を始め色々な論文において用いてはいるが、これを論じる視角と規定内容そのものは、とてもエンゲルスのそれとは同日には論じられないものなのである。とりわけ直接的生産過程に焦点を絞ったエンゲルスのいわゆる「生産そのもの」の「社会化」とか、専ら素材視点から規定された「生産手段の社会化」といった問題の立て方は、ヒルファーディングの資本主義分析の基本的視点に馴染まないものなのである。既述のように、エンゲルスは資本主義生産の根本的特徴を何よりもまず直接的生産過程における「生産手段の社会化」と「生産そのもの」の「社会化」、組織化、計画化とその「進展」に認めていたのであるが、ヒルファーディングの場合、いかなる視角から資本主義生産にアプローチしようとしたのであろうか？

この点はある意味でエンゲルス、ヒルファーディング両者の資本主義分析の視点の違いに関わる決定的問題であるとも言えよう。

さて、この点を明らかにするためには、やや回り道になるが、ヒルファーディングの経済学方法論に触れておくことがどうしても必要となる。

◇ヒルファーディングの資本主義分析の視角

ヒルファーディングは著『金融資本論』を大筋において仕上げつつあった1904~5年に *Neue Zeit* 誌上に、マルクス経済学の方法を論じた一論文を寄せている。これはマルクスの資本主義分析の方法についての解説という形をとって、マルクス経済学の方法——理論、歴史研究、政策論の全般に及ぶ——について彼自身の積極的主張を展開したものである。そこで提示されている彼独自の的方法論——「理論経済学」²⁴⁾, 「経済史」²⁵⁾, 「経済政策」²⁶⁾ の相互関係、更には、「社会主義社会」²⁷⁾ における「経済学」、とりわけ「経済政策の原理」²⁸⁾ の性格・内容にわたる独自の見解——の核心部分は、『金融資本論』首章の中に方法論と銘をうってではないが、明示的に組み込まれているのである。この論文はバーム・バヴエルク批判の論文とあわせて、ヒルファーディン

グがマルクス経済学についていかなる方法上の見解を懐いていたかを端的に示したものとして極めて重要なものと言ってよいのである。ここに示されている方法的見解は主著『金融資本論』の展開を深部において貫いているという点からしても、この書物を評価する際の軸点をなすものとも言える。

この論稿を仔細に検討すると、エンゲルスの資本主義分析の方法上の類似点よりも相違の方が大きいことに気付かされるのである。

早速先にみてきたエンゲルスの見解を念頭におきながら、この論文の核心部分をみておくことにしよう。

さて、ヒルファーディングが『金融資本論』を「大綱において」²⁹⁾仕上げつつあった1904年にNeue Zeit誌上に発表されたこの論文は、『カール・マルクスにおける理論経済学の問題提起』と題されており、これがマルクス経済学の方法問題を正面から論じるものであることは、この表題そのものによって明示されている。

この論文は直接には「価値理論家としてのリカードとマルクス」³⁰⁾と題する論文においてリカードとマルクスの価値理論の比較、検討を行なったJ・ローゼンベルクの見解の批判的吟味を通して、ヒルファーディング自身の解する所のマルクス「理論経済学」の方法——系論としての「経済史」、「経済政策」論の方法を含めて——を積極的に提示しようとしたものである。

さて、ヒルファーディングによれば、リカードに対するマルクスの決定的優位は何よりも資本主義分析の方法・視角の明確さという点に認められる。その点は何よりもまず資本主義における「富」³¹⁾の理論的扱い方についての両者の違いにはっきりと現われている、とヒルファーディングは言う。

国富の増大という政策課題の発生と共に、「国民の富とは何か？」³²⁾という理論問題が生じ、これを契機として経済科学が生成、漸次その体系化が進み、イギリス古典経済学は富の形成、増大についての研究の焦点を流通から生産に移した。これによって科学としての経済学の基礎が据えられた。しかしながら、ヒルファーディングに従えば、「富の本質」³³⁾の追究は古典派の課題ではあっても、マルクスにとっての問題ではなかった。ただし、「富は一定量の使用価値であり、この使用価値は人間と自然との活動の所産であり、そして使用価値の増大は労働生産性上昇の自明の結果であることは技術の示す通りである」³⁴⁾からである。マルクスにとっては、正に「富の形態は何か」³⁵⁾こそが問題なのであった。マルクスは、正に彼以外の経済学においては、「自明の前提」³⁶⁾とみなされていた所の「人間がその下で生産する所の状態が歴史的に変動するにしたがって」³⁷⁾「富」がとる「形態」如何をこそ追究する。古典経済学はその実質的完成者リカードにおいてさえ、この点は不明確であって、「使用価値」を問題にする「技術的考察」と「価値」＝「富の形態」³⁸⁾を対象とする「経済学的考察」³⁹⁾との峻別は不十分にしかなされなかった。マルクスの古典派に対する決定的優位も正にこの点にある、とヒルファーディングは言う。

ところで、古典派における「使用価値と交換価値」の無「区別」という彼の認識について言えば、周知の如くスミスもリカードもこの二契機の形式的「区別」は行なっているのであって、問題の本質がそこにある訳ではない。ことは労働の二重性の認識にも関わるものである。

学説上周知のこの点について、今ここでこれ以上かかずらう必要はあるまい。

問題はこの「使用価値」＝「技術的考察」の対象、「価値」＝「経済学的考察」の対象という

二分法である。しかも、この二分法は更に進んで「生産行程」の「経済学的考察」からの排除という所までいたるのである。すなわちヒルファーディングによれば、「経済学的考察」の対象となる特定の「社会形態」をとった生産物＝商品はもはや「生産行程」の産物ではなく、「その生産者達が入り込んでいる所の生産関係の表現である」⁴²⁾。何故なら「生産行程」は対象物を人間の特定の欲望にかなうように「その自然的性質を変更する」⁴³⁾過程にすぎず、したがって「技術的考察」にとどまるからである、と彼は言う。

そういう訳で、「マルクスによっては、生産行程は観察されなかった」。むしろ、マルクスにとっての問題は「もはや生産の自然的側面、すなわち人間の自然に対する作用ではなくて、むしろ生産における人間相互の関係」⁴⁴⁾なのである、と彼は主張する。

人はこのような論述にせって、生産過程と無関係な「生産関係」とは一体何のことかといぶかしく思い、ヒルファーディングの視野にはおよそ資本主義経済の基礎をなす資本一賃労働の関係が直接に展開する剰余価値生産の契機は入ってこず、そこにあるのは流通、交換の表面的現象のみだ、と論難したくなるであろう。この批判は当然に予想されるものであるが、ここでは問題はむしろそのこと以上に、「社会的形態規定」⁴⁵⁾とそれが包摂する生産過程とを機械的に切り離し、外的、形式的に対立させている点にあるのである。この点はエンゲルスの方法との関連で後に改めて論じることになろう。

しかし又、この「生産関係」の規定をめぐるのは、彼なりの論理があるので、超越的に批判するだけでは、彼の方法・理論構造の実相には迫り得ないであろう。

ヒルファーディングがいかなる視角から生産をとらえていたかは、次の一文に直截に示されている。少し長くなるが、彼の方法論の核心を示すものなので引くことにしよう。

「われわれに課されているのは、ただ一つの謎だけである。それは、社会的関係が表現される場所の基本的行程としての交換行為の中に、社会的生産過程 (der gesellschaftlichen-produktionsprozeß), すなわち社会の総労働による社会的需要の充足を永続的に可能ならしめるために貫徹し、又貫徹しなければならないところの法則を発見することにある」⁴⁶⁾。

みられる通り、ここでは「生産過程」は「社会的」なる形容詞を冠されることによって、総労働による種々なる社会的欲望充足の過程——歴史的「社会的形態規定」の下での——という視点からとらえられている。交換過程——『金融資本論』では「総交換過程」(sämtliche Austauschprozesse)⁴⁷⁾という表現によって、「社会的生産過程」との内的関連を示そうとする——に媒介される総労働の配分という見地からのみ「生産」が取り上げられ、したがって彼のいわゆる「生産関係」も、社会的分業の一環として、物＝商品の交換を介して有機的に結びつく人々の社会関係として規定される。

かくて、特定の「社会的形態規定」を受けとった生産物、すなわち商品が「生産行程」の「所産ではなく」、「生産者達が入り込んでいるところの生産関係の表現である」という一見意味不明に思われるヒルファーディングの論述の含意もこれによって明らかとなる。

こうみえてくると、ヒルファーディングの生産の「社会的」規定性とエンゲルスのいわゆる「生産そのもの」の「社会化」乃至「社会的生産」というとらえ方の、とりわけ両者の視点の違いは明らかであろう。

既にその要点をみてきたように、エンゲルスにあっては「社会的生産」(＝「個々の工場内部に

における生産の組織化⁴⁸⁾とは直接的生産過程の内部において行なわれる協業を基礎とした作業分業——生産が「一連の個人的行為から一連の社会的行為に変わる」こと——のことであった。

これに対しヒルファーディングの場合上記の如く「社会的生産過程」とは、社会的な「総交換過程」を媒介としての物同志——貨幣～商品——の社会的関連・形態をとって実現される所の、社会的総労働による各種社会的欲望の充足の過程に他ならなかった。その点では、エンゲルスの言うところの「社会的生産」と「取得形態⁴⁹⁾」との「矛盾」なるものもおおよそ出てきようがないと言ってよい。エンゲルスの議論を手放しで是とする立場からは、この点でもヒルファーディングの見解は論難の槍玉にあげられることになる訳である。

とまれ、両者の間では問題の設定の仕方がまるで違っているのである。なお、ヒルファーディングは専ら交換を重視する、いわゆる“流通主義”に墮するものとしばしば、とりわけ“正統”マルクス派によって非難されてきたが、それはその際ヒルファーディングが交換と言う時、それによって総生産の編成、総労働の配分を媒介する「総交換過程」のことを意味しているということとを頭から無視してきめつけたもので、超越的にすぎると言ってよいであろう。

ヒルファーディングは、「何が交換をして一の社会的現象（*einem gesellschaftlichen Phänomen*）たらしめているのか⁵⁰⁾」と問うて、「交換行為を通して始めて社会的連関——社会的総労働の環としての各生産者の「社会的連関」〈引用者〉——が表現され、又それを通してのみ表現され得る⁵¹⁾」が故に、「交換取引がいかに規制されるかを示すところの法則——この「法則」は彼の立論の文脈の中で価値法則を意味していることは明らか〈引用者〉——は、同時に社会の運動法則（*das Bewegungsgesetz der Gesellschaft*）である⁵²⁾」と述べているのであるが、ここにヒルファーディングの全問題意識の核心がある。一言にして言えば、ヒルファーディングは価値法則の貫徹の仕方・様式の分析視角から、資本主義生産にアプローチしているのである。このようなヒルファーディングの視点からすれば、エンゲルスが強調してやまない、直接的生産過程における生産の「社会化」とか「組織化」すなわち有機的相互連関の下で各個の部分労働者が一つの完成品の生産に向って非自立的、非自己完結的に共同作業をして行く分業の態様といったことは、「技術的考察」の対象とはなり得ても、ヒルファーディングの考える「経済学的考察」の対象たる「社会的生産過程」の問題ではあり得ない。ヒルファーディングの資本主義分析の特徴は、それがあくまで総体としての「社会的生産」——総生産の編成・総労働の均衡配分——という視点からなされているということである。

この言わば総体性とも言うべき視点からの資本主義分析が、マルクスの「理論経済学」の本質的特徴だというヒルファーディングの見解が、彼の方法論的・理論的確信に基づくものであることは、それがバーム・パウエルク批判に直接適用されていることによっても明らかである。

そこで、ヒルファーディングとエンゲルスの方法・視点の違いをより一層明らかにするのに役立つと思われるので、簡単にバーム批判中の関係部分に触れておくことにしよう。

ヒルファーディングはバーム批判の論文の中で、「社会化」について、資本主義が「人間を社会化する」（*vergesellschaftet...der Menschen*）⁵³⁾というやや奇異な言い回しで次のようなことを述べている。

「資本主義的生産様式はそれ以前のどの生産様式よりも一層広汎な範囲において人間を社会化した。すなわち人間の個人的存在を彼が置かれている社会的関係に依存するようにした。——こ

れは資本主義的生産様式の歴史的意義であって、これによってこの生産様式は社会主義社会の前段階として現われるのである⁵⁴⁾。しかも、この社会においては、かかる「社会的連関」は物と物の関係として現出し、したがって又「物の物象的属性の姿態をとる⁵⁵⁾」。

このようにヒルファーディングは資本主義生産の本質的特徴は「社会的」視点——前記の意味での——からとらえない限り理解し得えないものであることを強調してやまない。「商品又は資本を孤立的に考察する場合に、資本主義社会の諸現象がいかに把握され難いかということ、このことは、正に生産価格の変動の現象がわれわれに証明した所である。社会的総資本の部分に過ぎない個別資本の運動を支配しかつ説明するものは、むしろ、これらの資本がその中に存立している所の社会関係であり、又はその変動である。しかしながら、こうした社会的連関を国民経済学の心理学派の代表者は見ない。したがって、彼は必然的に、まさしく国民経済上の諸現象の社会的制約性を暴露しようとする理論——この理論の出発点となるものは社会であって個人ではない——を誤解する⁵⁶⁾」。この肝心要の点を逸したことがバームの最大の弱点であると断ずる。そして、ヒルファーディングは更に進んで、この基本的方法視角を自らのマルクス理解の形で提示する。

「マルクスは一定の組織形態——これは社会が生産力に賦与するものである——における人間社会の生産力を国民経済学的考察の基本概念とすることによって、経済的諸現象とその変動を、合法的な・生産力の変動によって因果的に支配される過程として叙述している⁵⁷⁾。ここには、エンゲルスの場合のように、個別の直接的生産過程における生産の「社会化」「組織化」、計画性と社会的レベルでの無政府性といった二分法に基づく問題設定が出てくる余地はない、と言わねばならない。

以上で、ヒルファーディングの資本主義分析の方法的特徴が、資本という歴史的「社会的形態規定」の下での総生産編成・総労働配分の分析という課題設定にあることが明らかとなった。

それでは、ヒルファーディングの総体性視点の下での資本主義分析にあっては、彼が先の方法論論文で明示的に述べたように、直接的生産過程に関わる問題は、「技術的考察」の対象として全く捨象されていたであろうか？

資本主義生産という歴史的形態の下で、特有の仕方での社会的生産編成がなされるということは、直接無媒介に、或は何の実体的基盤もなしに、それが実現されうるものではないことはあえて喋々するまでもないことであろう。実際ヒルファーディングが決定的に重視する、社会的総生産編成を媒介する「総交換過程」にしても、それは個別諸資本の競争が現出する場に他ならず、そこで繰り広げられる競争も、基本的には特別剰余価値の獲得を目指す生産方法の改良競争を実体的基盤とする——もちろん、部門間の競争がこれに絡む——ものであろう。

ヒルファーディング自身このことをわきまえていたことは、『金融資本論』、とりわけ第1篇から第4篇までの理論的分析の部分の内容自体が示しているのである。そうだとすると、総体性の視点から資本主義生産を分析する場合でも、個別資本の再生産過程の分析はその不可欠の環をなすものであることを、方法論論議においても彼は明確にしておくべきであった。

「生産行程」の分析の「経済学的考察」の排除という方法論は、ヒルファーディング自身の『金融資本論』の理論分析そのものによって実質上否定されているのである。

ヒルファーディングは『金融資本論』において、意識的に競争分析の手法で理論を組み立てているが、そこでの分析対象としての競争は言うまでもなく個別諸資本間の競争であり、それは現

実的基礎を再生産過程においてるのであって、エンゲルスとは全く異なる方向においてであったにせよ、資本の再生産過程の「経済学的考察」を抜きにしては、彼の競争分析は全く空洞化してしまっただろう。

彼は競争と不可分の関係にある資本主義的信用制度の分析に当たっても、自らの方法論に反して、資本の循環、回転——資本の生産過程を基軸とする——に焦点を絞って理論構築を行なっているのである。更には、生産性上昇の資本主義的表現としての有機的構成の高度化は、彼の恐慌＝産業循環分析の基軸的契機の位置を占めているのである。『金融資本論』においては、明らかにエンゲルスと異なって、生産力は正に資本に包摂された、「資本の生産力⁵⁸⁾」として明確に把握され、そのことから生ずる資本そのものにとっての障碍が、かかる生産力の画段階的發展に固有の問題として分析に付されているのである。更にその上で、この障碍を乗り越えようとする資本の側の対応として、金融＝独占体の市場支配、競争制限の必然性が論究されているのである。しかも注目すべきことは、このような巨大個別資本のこの生産力段階特有の行動が、資本主義的総生産編成の態様そのものの変容を導くという風に議論を展開している点である。ここに彼の方法論の軸点をなす総体性の視点と個別性のそれとの相互媒介関係の設定が、彼流の仕方ではあるが、ともあれ実質上理論それ自体の姿において結実しているとみてよいであろう。

超過利潤をひたすら追求する個別資本の無政府的な蓄積競争が過剰蓄積という困難を生み出しつつ、恐慌を決定的環とする産業循環を通して過剰を暴力的に清算すること（就中資本の価値破壊）によって、ともあれ社会的総生産の編成を結果において実現する次第を明らかにし、そこから更に、固定資本の巨大化が体现する、「資本の生産力」の歴史的、質的發展の下で、総生産の編成を媒介する個別資本の競争そのものが変化し、それに伴って生ずる蓄積競争の展開の場としての産業循環の変容の中に、「金融資本」による「社会的生産」の「組織化」の傾向を論定しようというのが、ヒルファーディングの総体性視点からの「金融資本」の理論的かつ「政策」論的分析＝『金融資本論』なのである。

エンゲルスの言うところの「生産手段の社会化」——ヒルファーディングにはこの表現自体もない——も、ヒルファーディングにあっては、資本によって包摂された生産力の発展がもたらす資本主義的所有の転化（＝「金融資本」の成立）として説かれ、しかも、それは資本主義生産の総体としての「組織化」に連なる問題として取り扱われている。ヒルファーディングが「社会的生産」の「組織化」の進展を論ずる場合、それはあくまで資本による総生産の編成の構造変化、すなわち無政府的競争——恐慌とそれに媒介される利潤率均等化に帰着する——を通じた社会的生産の編成から、少数巨大金融＝独占体の市場支配、競争制限による無政府性の部分的緩和（産業循環の変容）という形での「組織化」された生産編成への転化の問題として論じられているのである。エンゲルスの叙述と突き合せてみると、一見似たようなことを、似たような表現で論じているように見えるところも認められはするが、両者の基本的問題視角は明らかに決定的に異なっている。

エンゲルスの場合、生産力の画段階的發展と社会的生産編成の態容の変化の内的関連を理論的に設定するという問題関心は、ヒルファーディングに比して極めて稀薄である。

やや繰り返しになるが、エンゲルスにあっては、生産力の発展は、自己増殖する価値としての資本がその本性にしたがって行動する結果として、すなわち「資本の生産力」の達成としてとら

えられるというよりは、資本によって媒介されながら、これに対し外的に対立するものとして抽象的に設定される傾向が強い。「生産手段の社会化」も「生産そのもの」の「社会化」も資本主義生産の枠内でのそれである限り、「生産諸力のもつ資本という性質を廃止するものではない⁶⁰⁾」と繰り返し強調してはいるが、生産力の発展、それを体現する「生産手段の社会化」の各階梯が「近代の生産力の社会的本性⁶¹⁾」の事実上の認知の各段階だという表現の中に、「生産諸力」を資本という歴史的形態規定から引き離し、自立化させ、その上でそれを特殊歴史的、資本主義的生産関係、所有関係に抽象的に、外的に対立させて設定しようとするエンゲルスの問題視角の基調が明瞭に看取されるのである。次のような論述もこのような筆者の見方を補強するものと言えよう。

「これらの生産力そのものが、ますます力強くこの矛盾——生産手段と労働力の結合の可否が、それによって十分な利潤を生み得るか否かということのみによって判断され、決定されるという「矛盾」〈引用者〉——の揚棄をせまるようになる。すなわち、それを資本としての性質から解放することを、社会的生産力としての性格を事実上承認することを、せまるのである⁶²⁾」。更に又、エンゲルスにあっては、生産手段の集中、集積、所有形態転換の歴史的意味づけは繰り返しなされるが、この転換が蓄積形態の転換と相互媒介関係にあり、かつ又社会的生産編成の態様の変化でもある点は、内容的に、しかも理論的にほとんど明確にされていないように思われる。

◇「独占」・「社会化」論におけるエンゲルスとヒルファーディング

エンゲルスは、「同一産業部門に属する国内の大生産者達は相結んで、「トラスト」、すなわち生産の規制を目的とする連合体をつくる。彼等は生産すべき総量を決定し、それを自分達の間に割り当て、こうして予め決められた販売価格を強制する。しかし、このようなトラストは不況にぶつかると大抵はたちまちばらばらになってしまうので、正にそのためにトラストはなお一層集積度の高い社会化に向って駆りたてられる。一産業部門全体がただ一つの大株式会社になり、国内の競争はこの一つの会社の国内的独占に席をゆずる⁶³⁾」。かくて、「トラストにおいては、自由競争は独占に転化し、資本主義社会の無計画的な生産は、押し入ってくる社会主義社会の計画的な生産の前に降伏する⁶⁴⁾」、と言う。

ここで述べられていることは、少数の巨大独占体による生産の事前調整、そのための競争制限の現象そのものとその歴史的意味づけ——「社会主義」的計画の優越——にとどまるのであって、少数巨大企業は何故生産の事前調整という「目的」を追求せざるを得ないのか、その必然的根拠は何かについては、蓄積論的にはほとんどめぼしいことは何も言われていないと言ってよいであろう。つまり、「生産手段の巨大化」と「トラスト」の内的必然的関連が理論的にはほとんど全く説かれていないのである。生産力の「資本の生産力」としての発展が資本自体にもたらす困難とそれへの対応としての資本の行動の内的関係が理論的に設定され、解明されていないのである。

これに対し、ヒルファーディングは「固定資本の巨大膨張⁶⁵⁾」——「資本の生産力」の質的变化——が、不断に最大限の利潤を目指して死活の競争を展開する個別資本に対し不可避免的につくり出す困難——とりわけ資本破壊（物理的、価値的）という困難を中心とする——をめぐって、これを回避しようとする各産業部門、とりわけ基軸的重化学工業部門の少数巨大企業の市場支配、競争制限行動が展開されるというように、「生産手段」の「巨大化」とカルテル（エンゲルスの「トラスト」）、更にはトラスト形成の内的関連を理論的に説こうとしている。しかも彼の場合、資本

蓄積の全機構的展開としての産業循環過程にそくして問題が論じられているのである。

このことに関連して、「株式会社」論についても、両者の間に問題のたて方、その解明の方向という点で大きな隔たりを認めざるを得ないのである。すなわち、エンゲルスは『反デューリング論』において、「個人企業」から「株式会社」への転化を論じる際には、ともあれ蓄積論、しかも産業循環に関連づけて議論を進めているのであるが、その際、恐慌がもたらすいわゆる「大量の生産手段の社会化」は、この論文の最初の辺りに出てくる「分散した、矮少な生産手段」の「集積」としての「社会化」と同一の線上で論じられ得る性格のものではないという決定的に重要な論点に注意を払っていないのである。

独占の市場支配が問題となる段階での「大量の生産手段の社会化」は、「株式会社」形式を持つ資本集中と流動化機能に関わらせて始めてその意義も明らかになる性格のものなのである。いづれにしても、この段階の「大量の生産手段の社会化」は重化学工業の巨大な固定資本——「資本の生産力」の質的高度化の体現物——の登場という歴史的事態に対応する資本の特有の蓄積行動の分析を媒介にして、始めて理論的にその意義を確定できるのではなかろうか？ 実際、エンゲルス自身『資本論』第3部への補遺⁶⁶⁾の「2. 証券取引所」の中では、ともあれ「鉄」⁶⁷⁾、「化学工業」⁶⁸⁾、「機械制作工場」⁶⁹⁾等の重化学工業の、当時としては巨額の資本調達と「株式会社」形態の普及とを明示的に関連づけて——理論的には充分成功しているとは必ずしも言えないが——説いているのである。なお、「補遺」の性格上当然といえば当然であるが、銀行の固定資本信用と「株式会社」、証券市場の関連についての分析もなされていない。いづれにしても、上記の蓄積論視点は『反デューリング論』の「社会化」論においてこそ貫かれてしかるべきものであった。

マルクスは『資本論』第四篇中の「協業」論において既に、資本主義の起点において「大規模協業」⁷⁰⁾成立の「物質的条件」⁷¹⁾としての「生産手段の集積」及び「同時に搾取される労働者の数」⁷²⁾を規定する要件として「個別資本のある最少限度の大きさ」⁷³⁾について注意を喚起していた。資本主義の発展段階はおよそ異なるが、「株式会社」形態の普及、一般化の必然性を説くに当って、この「最少限度の」資本の大きさという契機は、まず第一に決定的な契機として位置づけられるべきものであろう。周知の如く、最低必要資本量がもはや個別資本の個別的蓄積基金によって、又銀行の短期の信用供与によっても充足し得ない程の額に達したという事情が、社会の内部に散在する諸々の貨幣、貨幣資本を集中する一つの機構として株式会社を、今一つの機構としての銀行制度との相補関係において、普及せしめた主要契機の一つであった。

エンゲルスの場合、その「生産手段の社会化」論の出発点においても、「矮少な生産手段」の「人々の総体によってしか使用され得ない生産手段」への転化によって、新たな「生産力」が形成され、その転化を媒介したのが資本だと言うだけで、この転化を可能ならしめる条件については、そこでは何も論じていないことが、彼のいわゆる「社会化」の「進展」を媒介する所有形態移行の論理を不分明なものにすることとなった。エンゲルスに従って、「個人企業」の「株式会社」への転化が「生産手段の社会化」の「進展」だと考えたとしても、この立論は蓄積論的視点からの分析抜きでは論証し得ないことなのである。その点は自明なことだから特に論及しなかったというよりは、それが彼の「生産手段の社会化」論の展開軸の位置を占める決定的要件だとは、エンゲルスは格別考えなかったのではあるまいか？ 因に、マルクスの場合は、その起点において「いわゆる本源的蓄積」⁷⁴⁾を通じて成立した資本主義的「大規模協業」、したがって又「生産手

段の集積」が、資本主義生産確立後は、資本蓄積そのものに媒介されて一層進展（マニュファクチュア→機械制大工業）するという説き方をしている。（『資本論』第4篇、第10章「協業」及び第7篇、第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」、第2節「蓄積とそれに伴う集積との進行途上での可変資本の相対的減少」、特にこの中で第4篇の「協業」論をふり返りながら「資本の加速的蓄積の方法」⁷⁵⁾と生産力増進との相互媒介関係に触れた部分を参照されたい）。

ところでヒルファーディングに立ち戻ってみると、彼は固定資本の巨大化が資本の競争的蓄積に及ぼす影響の分析という視角から、『金融資本論』3篇、11章において、「投下部分をめぐる諸資本の競争」⁷⁶⁾に対し、「固定資本の巨大膨張」⁷⁷⁾が及ぼす作用＝「諸障碍」について、当時の重工業における事実（ドイツ、アメリカを中心に）に目を配りながら立ち入った分析を試みている。すなわち、そこにおいてヒルファーディングは固定資本の巨大化が利潤率均等化を媒介する資本の部門間移動（流出入）に対する「障碍」となる点に着目して、一方でこの巨大化に伴う必要資本量の「巨大膨張」という難問を解決する一つの新たな機構として、「資本結合」⁷⁸⁾（Kapitalassoziation）を媒介する「株式会社」制度を位置づけると共に、他方この「株式会社」が、生産過程において巨大固定資本の姿で固定されるところの「資本の流動化」⁷⁹⁾（Mobilisierung des Kapitals）機構——これを通して「株式会社」は資本集中・合併の機構となる——でもあることを的確に論じている。かかる分析によって、ヒルファーディングは生産力の画段階的發展を体現する固定資本の巨大化と「株式会社」制度の内的関連を蓄積論視点から理論的に解明するという自らの課題を一応なし遂げ得たのである。のみならず、ヒルファーディングは更にこのような機構のみによっては処理し得ない、無政府の競争の帰結としての恐慌→不況の過程を通ずる資本破壊（とりわけ価値的破壊）の回避を目指す、少数巨大企業による市場支配、競争制限的行動を仔細に分析することによって、「固定資本の巨大膨張」と少数金融＝独占体による市場支配体制との内的、必然的関連をも理論的に究明しているのである。ここに至って、われわれは、エンゲルス、ヒルファーディング両者の「株式会社」論、「独占」論の隔たりが予想以上に大きいことに気付かされるのである。

ヒルファーディングの『金融資本論』3篇、11～15章にわたる立論の特徴は、彼の一貫した方法・問題視角である、総体としての資本主義的社会的生産編成の機構・態容の変化の解明と不可分の形で、個別諸資本間の競争構造・形態の変容を説いているところにある。

このような基本的視角からする金融＝独占体の支配構造とその下での社会的総生産の編成機構の全理論的分析の帰結が、「総カルテルの形成への傾向と、中央銀行の形成への傾向」⁸⁰⁾の合流に依拠する、「金融資本の強大な集積力」⁸¹⁾——それは「社会的生産に対する支配権を、ますます少数の最大の資本結合体の手に握らせる」——の成立は、「生産の指揮を所有から分離して、生産を、資本主義の内部で到達しうる限界まで社会化する」⁸³⁾（vergesellschaftet Produktion）ことによって、「生産の社会的統制の確立」⁸⁴⁾——但し「敵対的形態における社会化」⁸⁵⁾——を達成するが故に、「金融資本そのもの発展」⁸⁶⁾は無政府資本主義の「社会経済の組織問題」を「よりよく解決する」⁸⁷⁾という周知の謬見だったとしても、資本によって包摂された生産力の画段階的發展と総体としての資本主義生産の生産編成の態容・構造の変化を資本蓄積論の視角から内的に結合して説こうとした方向は、超越的批判によっては片付けられない意義を持つものと言ってよい。むしろ、エンゲルスのように「生産手段の社会化」の「進展」が、「社会的生産力の性格」を資本に「認知さ

せる」といった議論のたて方では、資本の蓄積運動にそくした解明とはならず、所有形態転換の資本主義的生産編成に対する意味も、それ自体として明確にはなり得ないのではあるまいか？

以上エンゲルスとヒルファーディングの「社会化」論、「独占」論を対比的に検討したところから、さし当たり筆者は次のような結論に達した。

エンゲルス流の議論は部分的には、特に表現の点でみれば、ヒルファーディングの立論にも似通った所は認められるにしても、両者の基本的分析視角、理論構造には極端に言えば、決定的と言ってよい程の隔たりが認められ、星野中氏の言われるように、エンゲルスのいわゆる「社会化」論的視座が後続マルクス派、とりわけそこにおける理論的中心の位置を占めたヒルファーディングに基本的に受け継がれ、それによって彼の『金融資本論』を含む理論的営為が規定されていたとは到底考えられないということである。

- 24)～26) R. Hilferding, Zur Problemstellung der theoretischen Ökonomie bei Karl Marx, die Neue Zeit 23 Jahrg. Bd I. 1904. Dietz, Verlag. S. 107, 玉野井芳郎・石垣博美訳『マルクス経済学研究』法政大学出版局, 1955, 12頁。以下 Problemstellung, 『研究』と略記。但し引用注は初出のみ。
- 27)～28) ibid., 同上。
- 29) R. Hilferding, Das Finanzkapital, Eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus, 1909, Dietz Verlag (1955), S. 5, 岡崎次郎訳『金融資本論』（上）岩波書店, 1955, 14頁。以下 Finanz, 邦訳(上), (下)と略記。
- 30) Problemstellung, S. 101, 『研究』108頁
- 31) ibid., S. 103, 同上113頁
- 32) ibid., 同上, 傍点引用者。
- 33) ibid., 同上, 傍点引用者
- 34) ibid., S. 103, 同上, 113～4頁
- 35) ibid., 同上, 傍点引用者
- 36) ibid., S. 104, 同上114頁
- 37) ibid., 同上
- 38) ibid., S. 104, 同上115頁, 傍点引用者
- 39) ibid., 同上, 傍点引用者
- 40) ibid., S. 104, 同上116頁, 傍点引用者
- 41) ibid., 同上
- 42) ibid., S. 105, 同上116頁, 傍点引用者
- 43) ibid., S. 104, 同上116頁
- 44) ibid., SS. 104～5, 同上116頁
- 45) ibid., S. 104, 同上116頁, 傍点引用者
- 46) ibid., S. 108, 同上123頁, 傍点引用者
- 47) Finanz S. 19, 邦訳(上)32頁, 傍点引用者
- 48) Anti-Dühring, ibid. (20) S. 252, 同上(20)279頁
- 49) ibid., S. 252, 同上279頁
- 50) Problemstellung, ibid., S. 107, 同上120頁, 傍点引用者
- 51) ibid., 同上, 傍点引用者
- 52) ibid., 同上, 傍点引用者
- 53) R. Hilferding, Böhm-Bawerks Marx Kritik, Marx Studien, Band I. 1904, Verlag der Wiener Volksbuchhandlung, S. 57., 同上『研究』212頁, 傍点引用者。以下 Anti-Böhmと略記。

- 54) *ibid.*, 同上, 傍点引用者
- 55) *ibid.*, S. 60, 同上217頁, 傍点引用者
- 56) *ibid.*, S. 51, 同上205頁, 傍点引用者
- 57) *ibid.*, S. 60, 同上217頁, 傍点引用者
- 58) K. Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, Bd. I, *Marx-Engels Werke* (23) S. 363, 邦訳マルクス, エンゲルス全集版『資本論』第1部, 国民文庫版(2)185頁, 傍点引用者, 以下, *Kapital*, 「文庫」と略記。
- 59) *Finanz*, S. 335, 同上(下)112頁
- 60) *Anti-Dühring*, *ibid.*, (20) S. 260, 同上(20)287頁
- 61) *ibid.*, S. 260, 同上288頁, 傍点引用者
- 62) *ibid.*, S. 258, 同上286頁
- 63) *Entwicklung*, *ibid.*, (19) S. 220, 同上(19)217頁, 傍点引用者
- 64) *ibid.*, SS. 220~1, 同上217頁
- 65) *Finanz*, *ibid.*, S. 267, 同上(下)15頁, 傍点引用者
- 66) *Kapital III, Werke* (25), S. 917, 同上「文庫」(8)477頁
- 67)~69) *ibid.*, S. 919, 同上479頁
- 70) *Kapital I*, *ibid.*, S. 652, 「文庫」(3)207頁
- 71) *ibid.*, I. S. 349, 同上「文庫」(2)180頁
- 72) *ibid.*, I. S. 350, 同上180頁
- 73) *ibid.*, 同上, 傍点引用者
- 74) *ibid.*, I. S. 741, 同上(3)357頁, 傍点引用者
- 75) *ibid.*, I. S. 653, 同上(3)208頁
- 76) *Finanz*, *ibid.*, S. 264, 同上(下)9頁
- 77) *ibid.*, 同上
- 78) *ibid.*, S. 268, 同上16頁, 傍点引用者
- 79) *ibid.*, S. 269, 同上18頁
- 80) *ibid.*, S. 350, 同上(下)132頁, 傍点引用者
- 81) *ibid.*, 同上
- 82) *ibid.*, S. 556, 同上423頁
- 83) *ibid.*, 同上, 傍点引用者
- 84) *ibid.*, S. 557, 同上423頁, 傍点引用者
- 85) *ibid.*, 同上, 傍点引用者
- 86)~88) *ibid.*, S. 351, 同上133頁